

# 大リーグにおける薬物問題と 米国スポーツジャーナリズム

— 野球殿堂投票のボンズ、クレメンズ得票増の背景をめぐって —

神 田 洋\*

## 要 約

本稿は、薬物使用疑惑のある選手が米国野球殿堂の記者投票で得票を伸ばしている背景を分析することで、スポーツジャーナリズムの問題点や野球殿堂が果たすべき役割を解き明かそうとしたものである。

野球殿堂の投票者へのアンケートの結果、1998年に起きた薬物騒動への対応に問題があったと多くの記者が考えていることが分かった。当時の報道の検証から明らかになったのは、球界幹部や報道陣に見られた薬物容認の姿勢であり、それゆえ選手だけに薬物問題の責任を負わせることへの疑問が高まった。今後は、野球殿堂が歴史博物館として薬物問題をどのように取り上げるかが課題となる。

キーワード：大リーグ、ドーピング、ステロイド、薬物規定、野球殿堂、報道、スポーツジャーナリズム

## はじめに

2017年の米国野球殿堂の投票で、ともに筋肉増強剤使用疑惑のあるバリー・ボンズとロジャー・クレメンズが過半数の票を得た。2013年に殿堂入り候補となった2人は2016年から得票を伸ばし、近い将来に殿堂入りを果たす可能性もある。

野球殿堂の投票者は野球記者である（詳細は後述）。彼らがなぜ薬物疑惑選手の殿堂入りを許容するようになったのか。この問題は野球記者が関わってきた過去の薬物問題報道に対する評価と切り離せない関係にある。したがってこの問題の追及は、野球記者の責任ひいては米国のスポーツジャーナリズムのあり方を問うものとならざるを得ない。

大リーガーの筋肉増強剤使用が初めて具体的

つ全米規模で報じられた1998年、テキサス大のジョン・ホバマンは薬物問題を追求し切れないスポーツ報道の欠陥を指摘した<sup>(1)</sup>が、薬物検査が導入された2003年以降は過去の報道検証が行われるようになり、1980年代後半からのいわゆる「ステロイド時代」を総括したESPNマガジンの2005年の特集「誰が知っていた？」<sup>(2)</sup>などが登場した。こうして過去の出来事として総括されたかに見えた薬物問題であったが、ステロイド時代に活躍した選手が殿堂入り候補となったことで近年問題が再燃し、選手のみならず、球界幹部や報道陣も含めた人々の薬物問題への対応が問い直されることとなった。

こうした状況をふまえて本稿では、第1に殿堂投票でボンズ、クレメンズ否定派から支持派に転じた投票者にアンケートを実施して投票理由について明らかにする。第2に上記のアンケートの結果、多くの投票者が問題の発端として強調した1998年の薬物騒動の報道を検証する。以上のこ

2017年11月30日受付

\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授 スポーツジャーナリズム

とをふまえ、第3に薬物疑惑選手にたいする評価が好転した背景を考察するとともに、スポーツジャーナリズムの構造的な問題や野球殿堂がこの問題に対して果たすべき役割についても言及することにする。

なお本稿では「ステロイドのゴッドファーザー」を自任したホセ・カンセコ<sup>(3)</sup>が大リーグに昇格してチームに筋肉増強剤を広め始めた1985年から、大リーグ機構が薬物使用に罰則を導入した前年の2003年までを「ステロイド時代」と呼ぶ。

## 1 殿堂入りの仕組みと大リーグの薬物規定、薬物使用の実態

本論に入る前に殿堂入りの仕組み、大リーグの薬物規定及び使用実態について説明しておこう。

### (1) 殿堂入りの仕組み

大リーグでは1936年にベーブ・ルースやタイ・カップら5人が初の殿堂選手となってから、300人以上が殿堂入りを果たしている。殿堂の競技者部門は9条からなる規定に基づいた投票で決まる。投票者は全米野球記者協会(BBWAA)に10年以上在籍するメンバーが務める。2017年の投票者は442人。投票内容の公表は任意で、309人が公表した。

投票方法は、あらかじめ提出された候補者リストの中から10人以内を連記(該当者なしも可)して投票し、得票率が75%を超えた選手が殿堂入りというもので、得票率5%未満の場合は翌年の候補資格を失う。第3条で定められている候補者の条件は、①大リーグで10年以上プレー、②引退後5年以上が経過、③引退後4年6か月以内に死亡した場合は死後6か月、④候補でいられる期間は10年間(2014年に15年間から改正)であり、⑤大リーグ機構が公示する失格選手は候補とならない<sup>(4)</sup>。

規定の第5条は「人格条項」と呼ばれ「選手の成績、力量、品位、スポーツマンシップ、人格、チームへの貢献によって選ぶ」とされている。細かい定義がなく、以前は便宜的な条項と目されて

いたが、薬物問題の高まりとともに「品位」の解釈が注目されることとなった。

なお競技者部門以外にベテランズ委員会による選出がある。ベテランズ委員会は殿堂入りした元選手らで構成され、選手以外で球界に貢献した人材や競技者部門で選出漏れした選手を対象とする。

### (2) 大リーグの薬物規定

大リーグは2003年に薬物検査を導入した。1998年に自転車のツール・ド・フランスで起きた薬物スキャンダルで、フランス政府が捜査機関に解決を委ねたことを機に、ドーピングは競技団体内にとどまらない問題となった<sup>(5)</sup>。1999年には世界反ドーピング機関(WADA)が発足し<sup>(6)</sup>、スポーツ界のドーピングが世界的なニュースとなった。注目の高まりの中、問題に背を向けてきた大リーグも例外ではいられなくなった。2002年6月18日、米上院の消費者問題小委員会が大リーグの薬物問題に関して公聴会を開催し、ジョン・マケイン議員らが薬物検査を導入しない大リーグ機構と大リーグ選手会を批判した。選手会のドン・フェア専務理事は筋肉増強作用のある薬物の店頭販売を禁じることが先決と主張したが、検査導入への動きは一気に進んだ。同年8月30日、2003年に検査を行うことで労使が合意した<sup>(7)</sup>。

2003年3月に大リーグで初めて実施された薬物検査は、ステロイド系の筋肉増強剤を対象とした実態調査のための検査で、罰則はなかった。2002年の協定により、この検査で陽性反応が5%を超えた場合に2004年から罰則付きの検査を実施することが決まっていた。1438検体の5%以上が陽性を示し、2004年から罰則が導入された<sup>(8)</sup>。違反1回目の罰則はなく、出場停止処分は2回目で15日間、3回目25日間、4回目50日間、5回目1年間。2005年には出場停止処分が違反1回目で10日間、2回目30日間、3回目60日間、4回目1年間に変更された。2006年には興奮剤が禁止薬物に加わって出場停止処分も厳格化され、違反1回目で50試合、2回目100試合、3回目は永久失格となった。

2012年のキャンプではヒト成長ホルモン

表1 米大リーグ薬物規定の変遷

年	違反1回目の罰則	最も重い罰則	備考
2003	なし	なし	対象はステロイド系筋肉増強剤、尿検査のみ
2004	なし	5回目で1年間出場停止	罰則を導入
2005	10日間出場停止	4回目で1年間出場停止	
2006	50試合出場停止	3回目で永久失格	興奮剤も禁止
2012	同上	同上	キャンプでHGH検出のための血液検査
2013	同上	同上	血液検査の全面導入、WADAで記録管理
2014	80試合出場停止	同上	

(注) MLB.com, AP通信の年譜より抜粋

(HGH) 検出のための血液検査が初めて行われた。血液検査は2013年には全面的に導入された。またWADAで選手の正常なテストステロン値などの記録を管理することも2013年に始まった。罰則は2014年にさらに強化され、違反1回目で80試合、2回目162試合(1シーズン)、3回目は永久失格となった<sup>(9)</sup>(表1参照)。

### (3) 罰則導入前の薬物使用

近年の殿堂投票では罰則導入前の薬物使用あるいは使用疑惑の扱いが議論となっている。ヤンキースなどでプレーしたジム・バウトンが1970年の著書で明らかにしたように、大リーグではアンフェタミンなどの興奮剤の使用が古くから横行していた<sup>(10)</sup>。しかしウエートトレーニングをタブー視する傾向が強く、陸上競技などのように筋肉増強剤が広まることはなかった<sup>(11)</sup>。筋肉増強剤が大リーグで本格的に流布するようになったのは薬物でパワーを手にしたアスレックスのカンセコがア・リーグ最優秀新人に選出された1986年ごろからだった。

スポーツ選手が競技のために使用する薬物は治療薬や麻薬などと区別され“performance enhancing drugs”(PED, 競技力促進薬)と呼ばれ、各競技団体や国際オリンピック委員会(IOC)などの組織が禁止して初めて“banned substances”(禁止薬物)となる。そのため2003年まで独自の薬物規定を持たなかった大リーグでは、薬物問題を論じる際に禁止薬物という言葉

使えないケースが多い。ただし2003年以前に禁止薬物が存在しなかったわけではない。米国では1990年に27種類のアナボリックステロイドを対象に、無許可の所持を禁じる法が成立した。これを受けてMLBは1991年に違法薬物の所持を禁止するとの通達を各球団に行った。通達文書には「ステロイドを含む」とあり、これによってアナボリックステロイドは禁止薬物となった。だが抜き打ち検査も罰則もなく、通達に関する報道発表もなかった<sup>(12)</sup>。当然のことながら通達は薬物使用の制限にはつながらなかった。

## 2 野球殿堂の投票者の意見

### — なぜボンズ、クレメンズ支持に転じたのか

#### (1) 得票伸ばすボンズ、クレメンズ

大リーグ史上最多の762本塁打を記録した外野手のボンズは筋肉増強剤の製造、取引で摘発されたカリフォルニア州の栄養補助食品会社バルコから薬物を提供されたことを2003年にサンフランシスコの大陪審で認めた。だが薬物が筋肉増強剤だったという認識はなく、関節炎の薬などと説明されていたと主張した<sup>(13),(14)</sup>。通算354勝投手のクレメンズは2007年に発表された大リーグにおける薬物使用の実態調査「ミッチェル報告書」で筋肉増強剤の使用が詳しく報告された。クレメンズ自身は報告書の内容を否定したが、元個人トレーナーが薬物使用実態を新聞などに告白し、調査にも協力。元チームメートもクレメンズの使用を示

表2 米国野球殿堂3選手の得票率と選出者

	マグワイア	ボンズ	クレメンス	殿堂入り選手
2017		53.8	54.1	バグウェル, レインズ, ロドリゲス
2016	12.3	44.3	45.2	グリフィー, ピアザ
2015	10	36.8	37.5	ジョンソン, マルティネス, スモルツ, ビジオ
2014	11	34.7	35.4	マダックス, グラビン, トーマス
2013	16.9	36.2	37.6	該当者なし(最多はビジオ)
2012	19.5			ラーキン
2011	19.8			R・アロマー, ブライレベン
2010	23.7			ドーソン
2009	21.9			ヘンダーソン, ライス
2008	23.6			ゴセージ
2007	23.5			リブケン, グウィン

(注) 得票率75%以上で殿堂入り、マグワイアは2016年で候補の資格失効、投票は10人まで連記可。  
全米野球記者協会公式サイト(bbwaa.com)より抜粋。

唆した<sup>(15)</sup>。ただしボンズとクレメンスはともに大リーグで罰則付きの薬物検査が導入された2004年以降に検査で陽性となったことはない。

2選手は2013年に初めて殿堂入り候補となった。ボンズは史上最多7度の最優秀選手賞(MVP)、クレメンスは同じく史上最多となる7度のサイ・ヤング賞(最優秀投手賞)に選ばれるなど実績は候補1年目で殿堂入りを果たすのに十分だった。だが薬物疑惑を問題視する投票者が多く、2015年まで両者とも30%台の得票にとどまった(表2参照)。票が増え始めたのは2016年で、2017年の投票ではボンズが53.8%、クレメンスが54.1%を獲得した。

ボンズ、クレメンスの得票率増加には、大リーグで監督通算2728勝のトニー・ラルーサ(2015年殿堂入り)と前コミッショナーのバド・セリグ(2017年殿堂入り)のベテランズ委員会選出による殿堂入りや、競技者部門の候補に入った他の薬物疑惑選手が存在が関係しているとみられる。BBWAA元会長のスーザン・スラッサーは2016年12月5日にツイッターで「セリグが殿堂入りしたし、ラルーサがすでに殿堂にいる。投票を修正しよう」とつぶやいた<sup>(16)</sup>。さらにフォロワーの質問に答え大リーグで薬物への罰則が導入された

2004年以降に検査で陽性になったのでなければ、薬物使用を殿堂入りのマイナス要素とはしないとの見解を明らかにした。スポーティングニュース誌のインタビューでは、ステロイド時代の球界幹部が次々と殿堂入りする中で、ボンズとクレメンスだけを投票の対象から外すことは難しいと語り、セリグらを選出した野球殿堂のベテランズ委員会が「ステロイド時代と折り合いをつけている」とした<sup>(17)</sup>。ニューヨーク・タイムズ紙は「その時代の中心人物(セリグ)をたたえるなら、全ての過ちを2人の選手のせいにするようになる」というスラッサーの言葉を紹介し、元会長の見解が他の投票者の決断に影響したと報じた<sup>(18)</sup>。前年までボンズ、クレメンスに投票していなかったスラッサーは言葉通り両選手に投票した。

ベテランズ委員会選出の殿堂入りは例年12月上旬に発表される。競技者部門の投票締め切りは12月31日のため、ベテランズ委員会選出の結果を踏まえた投票が可能になる<sup>(19)</sup>。2017年殿堂入り組の場合は、2016年12月4日にベテランズ委員会選出によるセリグの殿堂入りが発表された。

## (2) 投票理由

ボンズ、クレメンスの殿堂投票での得票増の背

景にはスラッサーの主張以外にどのような要素があるのか。投票内容を公表した記者のうち、ボンズ、クレメンズ否定派から転じて両選手に投票した34人へ2017年5月30日にEメールでアンケートを送付し、6月10日までに11人から回答を得た(表3参照)。アンケートでは①ボンズ、クレメンズへの投票に転じた理由、②球界幹部や監督を含む他の候補者の投票との関連の有無、③ステロイド時代におけるメディアの責任、について質問した。

ここではまず2選手への投票理由から明らかにしたい。投票理由に前コミッショナーのセリグの殿堂入りを挙げたのは4人。薬物使用者と非使用者を区別する根拠が不十分で使用者の特定が困難なことを挙げたのが7人(3人はセリグ殿堂入りと両方)。その他の理由が3人で、うち2人は疑惑選手の殿堂入りを認め、殿堂で「ステロイド時代展示」を行うべきだと主張した。

## (2)の1 セリグ殿堂入りの影響

セリグの殿堂入りを理由とした4人はいずれも2016年(2017年殿堂入り組)からボンズ、クレメンズに投票をし始めた。

トム・ダンジェロは「セリグがベテランズ委員会の選出で殿堂入りしたことで、ボンズとクレメンズを除外する理由がなくなった」とし「セリグは選手と同じようにステロイド時代の一部で、問題が顕在化したときに無視を決め込んだ」と1990年代に手を打たなかった責任を問う。ジョン・フェイは「セリグがステロイド時代を招いた」と最高責任者が初期の対応を誤ったことを問題視し、薬物規定などをコントロールする立場の人間を殿堂入りさせ、薬物使用者を排除することが偽善であるとした。アート・マートンは「最後には選手会に薬物検査導入を認めさせ、排除とまでは言えなくとも、薬物の影響を制限した」とコミッショナーとしての仕事を評価する一方「ステロイド時代の危機を招いたのは、オーナーたちの黙認という形での(選手との)共犯だった。ストライキの影響から脱することに(薬物による)本塁打増を利用した」と1994年のストライキ<sup>(20)</sup>で被っ

た経済的損失を埋めるため、コミッショナーが本塁打記録に挑戦するスター選手を対象とした薬物取締を怠ったとの見方を示した。

マートンが「薬物使用を許した者をたたえ、選手を罰することはできない」とするように、いずれの投票者も選手だけを罰することに反対し、投票基準を見直したと主張した。

## (2)の2 薬物使用選手の特定、区別の難しさ

ダニエル・ノブラーはボンズ、クレメンズが候補になって2年目の2013年(2014年殿堂入り組)から2人に投票をし始めた。「2人が薬物を使っているという確信があったが、薬物検査導入以前は証拠がなく、確かなことなどない」とする。罰則が導入された2004年以降に検査で摘発された選手には投票していないという。クリス・バーは「薬物使用者はすでに殿堂入りしているし、これからの候補にもいるだろう」とボンズ、クレメンズだけを使用者と断定できないとの結論で2016年(2017年殿堂入り組)から両選手に投票した。2015年(2016年殿堂入り組)から両選手に票を入れ始めたジェリー・クラズニックは「誰が使用者で誰が違うか皆知っている気であるが、実は推測に過ぎない。自分が投票した世間的にクリーンだと目されている選手がステロイドに手を出していたとしても驚かない」と述べた。

同時期に殿堂入り候補となった薬物疑惑のある選手の名を挙げ、ボンズ、クレメンズだけを糾弾する矛盾を指摘した記者もいる。ロジャー・ルービンはいバン・ロドリゲス(2017年殿堂入り)、ダンジェロはマイク・ピアザ(2016年殿堂入り)とジェフ・バグウェル(2017年殿堂入り)＝表2参照＝に薬物使用疑惑があったとした。いずれの選手も薬物検査で摘発されたことはないが、ロドリゲスは何度もステロイド注射を受けたことをカンセコの著書で暴露され<sup>(21)</sup>、ピアザとバグウェルは筋肉増強剤のアンドロステノジオンが禁止される前(2003年以前)に、摂取したことがあると認め<sup>(22)</sup>。フェイはボンズ、クレメンズをピアザと比較し「証拠の量が違うだけ」とした。

疑惑の選手が候補の中に増加し、殿堂入りも果

たしていることでますます薬物使用者の特定が困難になったと各投票者とも主張している。

### (2)の3 殿堂で「ステロイド時代展示」を

アンソニー・マッカロンは2015年（2016年殿堂入り組）からボンズ、クレメンズに投票。「薬物は野球の歴史の一部。人を不快にさせるとしても、殿堂の一部であるべきだ。2人は時代を代表する選手で、殿堂入りすればこの時代の見栄えのいい部分だけでなく全てを展示することになる」と殿堂が薬物問題についての展示を行うことを求めた。ジェーソン・スタークは2014年（2015年殿堂入り組）から両選手に投票している。史上最多本塁打とサイ・ヤング賞最多受賞の実績を強調し「史上最高ランクの選手が存在しなかったかのよう装う殿堂は考えられない」と説明した。「自分は最高の選手に投票するだけ。殿堂がプレートに何かを書き入れるか、ステロイド時代全体をまとめる展示をするか、歴史博物館がするように野球にとって重要な時代をできる限り正直に説明するべきだと思う」と提案した。

### (3) 記者の責任と限界

11人のうち9人がステロイド時代に関して記者にも責任があると述べた。1人は責任がないと

し、1人は分からないとした。

記者に責任があったとした9人のうち4人がカージナルスのマーク・マグワイアの薬物使用が発覚した1998年の報道（詳細は後述）の問題点を指摘した。マートンは最初に薬物について報道したAP通信のスティーブ・ウィルスタインが一部の記者から批判されたことを重視し、球界全体にあった薬物問題への姿勢が報道陣にも影響したとした。クラズニックはマグワイアとカプスのサミー・ソーサがともに大リーグのシーズン最多本塁打記録を破った1998年の本塁打争いの報道に触れ「みんな歓喜に包まれていた。チアリーダーのような当時の原稿を読むとちょっと気持ち悪くなる。野球記者は批判されて当たり前」としながらも「薬物検査はなかった。成績や体つきで薬物使用を摘発することはできない」と報道の限界について説明した。マッカロンは「1998年に薬物関係の取材はあった。だがメディアも含めてアメリカは野球の復興を祝福するムードに包まれていた。疑いはそれ以上のものにならなかった」と当時を振り返った。同時に報道の難しさについて「どんどん大きくなる選手がいても、薬物使用だとは報道できない。薬物を使っていると思うこととそれを証明することは違う」と説明した。

スタークは薬物に関する知識の欠如が初期の報

表3 ボンズ、クレメンズ肯定に転じた投票者

氏名 (所属)	投票理由	記者の責任
ダニー・ノブラー (CBS スポーツ)	否定する根拠が不十分	ある
ロジャー・ルビン (NY デーリーニュース)	否定する根拠が不十分	ある
ジョン・フェイ (シンシナティ・エンクワイラー)	根拠/セリグ	ある
トム・ダンジェロ (パームビーチ・ポスト)	根拠/セリグ	分からない
ジェーソン・スターク (ESPN.com)	殿堂で薬物展示	ある
リチャード・ジャスティス (MLB.com)	その他	ある
クリス・バー (FOX スポーツ)	否定する根拠が不十分	ある
アート・マートン (CSN ニューイングランド)	セリグの殿堂入り	ある
ジェリー・クラズニック (ESPN.com)	否定する根拠が不十分	ある
アンソニー・マッカロン (スポーツネット NY)	殿堂で薬物展示	ある
バーニー・ウィルソン (AP 通信)	根拠/セリグ	責任はない

道の方向性を決めたとして「残念ながらタイムマシンで1998年に行って今の知識で報道することはできない。もっと問題提起をしていればと思う。記者がそうできていれば、あれほど薬物は蔓延しなかったかもしれない。ただ当時薬物を理解して報道することは、今考えるよりも難しいことだった」と述べた。

ノブラーは「検査結果や購入記録などが無い限り、特定の選手の薬物使用について道義にかなった報道をすることはできない」と報道の限界への理解を求め「薬物蔓延を容認した大リーグ機構と選手会についての報道はもっとあってよかった。状況を直接変えることができたのは彼らだ」と主張した。

記者に責任はないと主張したバーニー・ウィルソンは「AP通信はマグワイアのサプリメントについて報道することで状況を明らかにし、現状に光を当てた」と大リーグ機構や選手会主導ではなく、報道がきっかけで薬物対策が始まったことを強調した。

ジャーナリストの責任の直接的な根拠として1998年の本塁打記録報道を挙げた4人だけでなく、アンケートに答えた11人のうち7人が何らかの形で1998年の報道に言及した。次章ではマグワイアの本塁打記録に沸き、薬物問題が顕在化した1998年のシーズンが当時どう報じられたのかを検証する。

### 3 1998年の本塁打争いと薬物問題は どう報じられたか

#### (1) 1998年の薬物問題

1998年8月21日、AP通信はウィルスタインの「薬物、球界ではOK、五輪では駄目」と題した記事を配信した。大リーグのシーズン本塁打記録更新に挑戦するマグワイアが筋肉増強効果のあるアンドロステンジオンを使用しているという内容だった<sup>(23)</sup>。アンドロステンジオンはテストステロンの前駆体で、体内でテストステロンの生成を促す。旧東側諸国のコーチや科学者が市場で販売を始め、西側諸国では1990年代半ばに普及。米

国では経口摂取できる錠剤が2004年に禁止されるまで合法的に売られた<sup>(24)</sup>。当時大リーグは独自の薬物規定を持たなかったが、アンドロステンジオンは五輪やプロフットボールNFLでは禁止されており、1996年のアトランタ五輪陸上男子砲丸投げの金メダリスト、ランディ・バーズはアンドロステンジオンの使用で無期限失格処分を受けた。記事はオハイオ州立大の専門家が「アンドロステンジオンはステロイドである」と認定したことも記した。マグワイアはAP通信の取材に「使ったのは全て自然なもの。皆が同じものを使っている」と話した。

ウィルスタインは7月にマグワイアのロッカーで薬物の容器を見つけて取材を進めた。匿名性が高かったそれまでの薬物報道と違い、薬物名を特定し、選手も使用を認める画期的な記事だった。

スポーツ・イラストレーテッド誌のクリフ・ココランは、1998年にマグワイアの問題が報じられるまで、大リーグでの筋肉増強剤使用が公に語られることはほとんどなかったとしている。薬物問題の専門家ゲリー・ワドラーは「ウィルスタインが最初だった。問題のふたを開けた人間として名が残るだろう。非常に重要な出来事だった」と述べた<sup>(25)</sup>。

渦中のマグワイアは1998年に結局70本塁打を放って37年ぶりにシーズン記録を更新した。2001年の引退までに歴代5位(当時)の通算583本塁打を記録したが、殿堂投票では2010年の得票率23.7%が最高で、2016年を最後に競技者部門候補の資格を失った(表1参照)。アンドロステンジオンだけでなく他のステロイドを摂取していたことを引退後の2010年に告白した。

#### (2) 球界幹部の対応

第2章でステロイド時代の中心人物とスラッサーが指摘した2人、前コミッショナーのセリグとアスレックス、カージナルスなどで監督を務めたラルーサは1998年に薬物問題にどう対処したのだろうか。

1998年8月26日、当時のコミッショナー、セリグと大リーグ選手会専務理事のフェアはAP通

信の報道を受けて共同声明を発表し「問題の物質（アンドロステンジオン）は処方箋なしに店頭で購入でき、食品医薬品局の規制対象でもない。これらの事実から、このような報道によってマグワイアのような選手の業績の価値が貶められるべきでない」とした。薬物の効能や副作用については「科学的、医学的データを集め、専門家の助言を仰ぐ」と評価を避けた<sup>(26)</sup>。2005年の報道によると、セリグは声明を発表する前にカリフォルニア大ロサンゼルス校（UCLA）にあった薬物検査研究所の所長ドン・カトリンからアンドロステンジオンの筋肉増強効果について説明を受け、抜き打ち検査を実施する以外に筋肉増強剤を締め出す手立てはないと忠告されていた<sup>(27)</sup>。

カージナルスはチームの主砲マグワイアが使用したアンドロステンジオンについて「アナボリックステロイドの効果も顕著な副作用も証明されていない。トレーニングの約1時間前に摂取することで効果がある」と使用を勧めているとも取れる声明を発表した。ペンシルベニア州立大のチャールズ・エサリスは、カージナルスの声明がどう主張しようとアンドロステンジオンはまぎれもなくステロイドであると指摘した<sup>(28)</sup>。

カージナルス監督のラルーサは、AP通信がマグワイアのプライバシーを侵害したと非難し、クラブハウス取材からAP通信を締め出したいと話した<sup>(29)</sup>。ラルーサはアスレチックスの監督時代にもテレビでカンセコのステロイド使用を示唆したワシントン・ポストのコラムニストを「うそつき」だと批判したことがあった<sup>(30)</sup>。

### (3) 「史上最高のシーズン」

1999年4月27日のシンシナティ・エンクワイラー紙に「1998年は野球史上最高のシーズンだったのか」という記事がある<sup>(31)</sup>。「1人だけでなく2人の愛すべきスラッガーがロジャー・マリスの記録を粉々にした」とマグワイアとソーサが激しい本塁打王争いの末、ともにシーズン最多本塁打記録を破った熱狂を振り返り、1999年に刊行された『ザ・パーフェクト・シーズン なぜ1998年は野球史上最高なのか』という本を紹介してい

る<sup>(32)</sup>。紹介されているもう一冊の本『98年の夏』には「野球がアメリカを救った」との副題がある<sup>(33)</sup>。「史上最高」は決して大きな表現ではなく、当時の野球ファンの共通認識だったことがうかがえる。だがこの記事は本塁打記録への挑戦のさなかに起きた薬物騒動には触れていない。前年8月に報じられたマグワイアの薬物使用はまるで忘れ去られたようだ。

### (4) AP報道への各社の反応

コミッショナーがマグワイア擁護の声明を出したことから分かるように、1998年8月にAP通信のウィルスタインが報じたマグワイアのアンドロステンジオン使用のニュースは大きな反響を呼んだ。ニューヨーク・タイムズ紙を中心に薬物使用を追求する報道があったが、同時に「ウィルスタインは大リーグのクラブハウスで最大の敵になった。球団や選手からだけでなく、反撃は記者からもあった」<sup>(34)</sup>という現象も起きた。

8月26日付のポストン・グローブ紙は「マグワイア迫害は犯罪だ」と題し「本塁打記録への挑戦は、タブロイド紙（AP通信、ニューヨーク・タイムズ紙を指す）が起こした論争に巻き込まれてペテン呼ばわりされている」と薬物使用を追求する報道を痛烈に批判。アンドロステンジオンを「自然なステロイド」と評価し、厳しい薬物規定を設ける国際オリンピック委員会（IOC）を皮肉って「（インスタントコーヒーの）マクスウェルハウスを8杯飲んで打席に立ったら、マグワイアはメダルをはく奪される」と記した。また本塁打が技術で生み出されるもので、筋肉増強剤は本塁打増につながらないなどと論じた<sup>(35)</sup>。

マグワイアが当時所属したカージナルスの地元セントルイスではセントルイス・ポストディスパッチ紙が8月29日付でAP通信を批判した。記事は「このコラムをスポーツライターの競技力促進薬であるカフェイン（コーヒー）の助けを借りて書いていると明らかにしなければならない」と書き出されており「マグワイアがステーキ好きだと分かたら、次はベジタリアンが激怒するだろう」として、ロッカーで薬物の容器を見つけたAP通

信の取材法を批判するように「今度は AP 通信が冷蔵庫をのぞくかもしれない」と揶揄した。米各地の新聞の反応にも触れており、フォートワース・スターテレグラム紙の「(AP 通信は) スキャンダルをつくり上げようとした。論争を巻き起こすこと以外に報じる理由はない」や「ウィルスタインがあなたの家に来たら薬棚を勝手にのぞいていいのか。失礼でプロらしくない」という言葉を引用。マイアミ・ヘラルド紙の「今年一番ばかばかしいスポーツ報道を盛り上げたのが、アンドロステンジオンがやった唯一のこと。合法である限り何を使おうとマグワイアの勝手」という主張も紹介している<sup>(36)</sup>。野球記者のレナード・コペットはテレビショーで「誰も気にしない。不正ではないし、ビタミン剤や(興奮剤の)『グリーンニー』と同じようなもの」と言った<sup>(37)</sup>。

#### (5) 報道検証——マグワイア擁護の根拠

1998 年の大リーグでは筋肉増強剤の使用を擁護、あるいは黙認する報道が数多く見られた。同時代の他のスポーツ報道にこれだけ開け広げな薬物擁護は見られない。違反者を糾弾してモラルの欠如を嘆くのが典型的な薬物報道<sup>(38)</sup>で、1988 年ソウル五輪の陸上男子 100 メートルでカナダのベン・ジョンソンが金メダルをばく奪された際に顕著にその傾向が表れた。1998 年はツール・ド・フランスの薬物スキャンダルで反ドーピングの機運がこれまで以上に高まっていた。自転車強国である米国でも、ツール・ド・フランスの薬物問題は批判的に報じられたが、大リーガーのマグワイアに対しては擁護する報道がなされた。

ここではマグワイア擁護報道の根拠を検証することで、殿堂投票者が言及したステロイド時代の野球記者の責任及びスポーツジャーナリズムの構造的問題について考察したい。

#### (5)の1 アンドロステンジオンの「合法」性

マグワイア擁護報道の最大の根拠は、アンドロステンジオンが大リーグで禁じられていなかったという事実だ。ジャック・マッカラムは一般社会でも球界でも合法的な薬物であることを強調して

「マリスの本塁打記録を破ったとして、薬物使用で偉業が傷つくことはない」とし、禁止薬物を使ったなら非難されるべきだが、合法的な薬物の使用を批判するなら、大リーグ機構よりもマグワイアに高い規範を求めることになる主張した<sup>(39)</sup>。オレンジカウンティ・レジスター紙は同じ根拠で「間違っていない。ルールを破っていないし、拡大解釈すらしていない」とマグワイアを擁護した<sup>(40)</sup>。五輪に選手を派遣せず、独自の薬物規定も持たなかった 1998 年当時の大リーグでは、米国の法で禁じられた薬物以外なら全て「合法」だったのだ。

大リーグに薬物規定がないだけでなく、普遍的なドーピングの定義が明確でないことが、薬物問題を複雑にする。五輪では 1968 年のゲルノーブル冬季、メキシコシティ夏季両大会から薬物検査が導入された。IOC は 1988 年のソウル大会の前にドーピングを「禁止薬物を使用すること、血液ドーピングのような不法な手段をとること」と定義し、続いて「禁止薬物」や「不法な手段」を列挙した。カール・ハインリッヒ・ベッテとウヴェ・シマックは、ドーピングの本質的定義が困難で、違反薬物や違反行為の一覧を作る列挙的定義に頼るしかないことを IOC の発表が示していると指摘した<sup>(41)</sup>。2000 年 1 月に活動を始めた世界反ドーピング機関 (WADA) もドーピングを列挙的に定義している。つまりドーピングとは、競技団体や国際スポーツ団体によって禁止され、ドーピングと認定された薬物を使用することという意味でしかなかったのであり、1998 年の大リーグにはドーピングが存在しなかったと言うことも可能で、一定数の報道陣が薬物使用を容認する姿勢を取ったことも不思議でない。

米国では 1994 年の法改正で食品医薬品局 (FDA) のサプリメント規制が弱まり、アンドロステンジオンなどの新しい筋肉増強剤やエフェドラなどの興奮剤が広く市場に出回った。マグワイアの活躍の影響で、1999 年のアンドロステンジオンの売り上げは前年の約 10 倍の 5 千万ドルになった。レッドソックスの強打者モー・ボーンのようにアンドロステンジオンを製造、販売したサ

プリメント会社と契約を結んでいた選手もいた<sup>(42)</sup>。アンドロステンジオンの販売が禁止された2004年には、駆け込みで購入する人が殺到したという。2005年に米国の規制薬物リストに加えられた<sup>(43)</sup>。

当時の米国社会の状況を見れば、野球界に薬物が蔓延していたことは容易に推測できる。ただ合法の薬物であっても選手が公に使用を認めることはほとんどなかった。ノブラーは「隠そうとすることで分かるように、以前から選手たちには薬物使用が不正だという意識はあった」と振り返る<sup>(44)</sup>。

カンセコは2005年の著書でマグワイアがアンドロステンジオンの合法性を利用して違法薬物の使用を隠したと推測した。意図的にアンドロステンジオンの容器を記者の目につく場所に置いて問題を起こすことで、国の規制薬物に指定されていたアナボリックステロイド使用疑惑の追及から逃れたというのだ。マグワイアはアスレックス時代からステロイドを使用しており、アンドロステンジオンを摂取する意味がないとして「マグワイアがアンドロを使うというのは、モルヒネを打たれている入院患者が（鎮痛剤の）アスピリンを欲しがるといふようなもの。まったく意味がない」と記した<sup>(45)</sup>。マグワイアは引退後の2010年1月11日、カンセコの推測を裏付けるように、選手時代のステロイド使用を告白。1989年のシーズン後に初めて試し、1993年以降は定期的に使用していたことを明らかにした<sup>(46)</sup>。

## (5)の2 薬物知識の欠如

マグワイアを擁護した報道の中には薬物への見識のなさを示すものが多かった。新聞記事の中にはアンドロステンジオンが合法で店頭販売されていることを強調して、子供に人気のシリアル食品「ウィーティーズ」と比較したものもあった<sup>(47)</sup>。1998年のシーズンが終わるまでには大リーグの多くのチームドクターたちが生殖機能や肝機能の低下を招くとしてアンドロステンジオンに手を出さないよう選手に忠告していた<sup>(48)</sup>。にもかかわらず、合法であることを強調する報道には、危険性の認識がほとんどなかった。

ペンシルベニア大のチャールズ・エサリスは野

球記者の薬物に関する知識の欠如を指摘している。理系出身ではないことを理由に挙げた取材記者がいたことに対し「これはロケット工学ではない。近くのジムに行けば知りたいことは1時間で分かる」と批判した。記者の中にはウエートトレーニングが野球に役立たないとするなど間違った認識を持っている者も多かった<sup>(49)</sup>。

ジャスティスはアスレックスを取材した際に、従来見たことのないほどウエートトレーニングに取り組む選手たちを目にした。「選手たちに何が起きているか分かっていなかった。ステロイド問題の状況が分かっていなかった。（陸上男子短距離の）ベン・ジョンソンが失格になったことは分かっていた。だがステロイドが野球選手をどれだけ良くするかが分からなかった」と述懐する<sup>(50)</sup>。

ホバマンは、薬物の性質にも、カリスマ選手の薬物使用が生む社会的影響にも無関心なマグワイア報道は、米国社会のドーピング黙認の姿勢を示していると主張した。1998年4月に発売されて記録的な売り上げを見せたED（勃起不全）治療薬バイアグラが治療と娯楽両面の性質で薬物の用途をあいまいにしており、薬で能力を増強することが一般社会で珍しくなくなったことを挙げて、競技力促進薬物の蔓延もその社会現象と無縁でないと指摘した<sup>(51)</sup>。

## (5)の3 ストライキと野球の復興

殿堂投票者のマートンは、薬物使用が大きなニュースとなった1998年にコミッショナーが問題解決に着手しなかったのは、1994年のストライキで被った損失を埋めるためにマグワイアの本塁打記録に水を差せなかったのが原因との見方を示した<sup>(52)</sup>。1998年の報道には、コミッショナーが望んだ野球復興への流れに大半のメディアが乗り、全米の熱狂を生み出す手伝いをした一面がある。

大リーグは人気でもビジネスの規模でも米国のプロスポーツを長年リードしてきた。だが1960、70年代にいち早くテレビを味方につけたプロフットボールNFLに、テレビ視聴率や1試合平均の観客動員数で先行を許した。1980年に大リーグ機構がテレビ局と結んだ放送権の契約は合計で

4750万ドル。NFLは1億6400万ドルだった<sup>(53)</sup>。 だろうか<sup>(58)</sup>。

その状況に変化をもたらしたのが1984年にコミッショナーに就任したピーター・ユベロスだった。ユベロスは同年のロサンゼルス五輪で組織委員会会長を務めて大会の収支を2億5千万ドルの黒字にし、五輪は儲からないというスポーツビジネスの常識を変えた。その手腕を買われて野球界に迎え入れられると、在任中に期待通りCBSテレビと4年11億ドル、スポーツ専門ケーブル局ESPNと4年4億ドルの放送権契約を結んだ。大リーグは1987年に14年ぶりとなる黒字を達成した。ユベロスは1期4年で退いたが、大リーグはユベロスが築いた土台によって経済的安定を手にした<sup>(54)</sup>。

安定期に入ったと思われたリーグ経営に危機が訪れたのが、1994年だった。年俸総額の上限を定めるサラリーキャップ制の導入などを目指したオーナー側に選手会が激しく反発し、8月12日にストライキに入った。初のワールドシリーズを目指すエクスポズが勝率1位で、打率3割9分4厘だったトニー・グウィンには4割の期待がかかった注目のシーズンだったが、残り試合は全て中止に。90年ぶりにワールドシリーズが行われなかったこととなり、ストライキは翌シーズンにまたがって232日間続いた。シーズンが再開した1995年の1試合当たりの観客動員数は前年から約20%減の2万5260人で、ストライキ前のレベルの3万人に戻ったのは2004年だった<sup>(55)</sup>。

ストライキは、ちょうどサプリメント規制が緩やかになった時期と重なり、球場のトレーニングルームを使用しなくなった選手たちが地元のジムで薬物を手に入れ、筋肉増強剤が球界に一気に広まったとする見方もある<sup>(56)</sup>。

1992年にコミッショナー代行となったセリグは、ストライキを挟んで選手会との交渉を続け、1997年3月に収益再分配制などを含んだ新労使協定の合意にこぎつけた。1998年7月には正式にコミッショナーに就任<sup>(57)</sup>。直後の8月にマグワイアの薬物使用が発覚した。選手会が薬物取締に消極的だったのは、野球の失地回復を目指すコミッショナーとしてはむしろ好都合だったのではない

#### (5)の4 スポーツジャーナリズムの構造的問題

長いストライキは、伝えるべき試合を失ったスポーツ報道にとっても苦難の時期だった。1998年に薬物から目をそらし、華々しい本塁打競争を追いかけた要因の一つが、まだ生々しいストライキの記憶だったことは間違いないと思われるが、大リーグ機構が描いた野球復興の物語を各メディアが簡単に後押しした理由は他にもある。

ベッテとシマンクはスポーツジャーナリズムが「お抱えスポークスマン」になっている構造的問題を指摘した。競技団体への出入りを頼みとする記者が暴露報道をすることは自殺行為で、ドーピングを暴くことなどはないと指摘する<sup>(59)</sup>。

ホバマンは1998年のマグワイアの薬物問題を受け、スポーツジャーナリズムに調査報道が不足していると論じた。スポーツ記者は薬物問題を取材する力がなく、薬物スキャンダルは競技団体や警察が起こしたアクションを報道することで初めて起こるというのだ。マグワイアのアンドロステンジオン使用を伝えたAP通信の報道も偶然の産物で、記者は薬物に関して突っ込んだ質問ができないとした<sup>(60)</sup>。

ゼブ・チェーフエッツは野球記者と球団との癒着とも言える深い関係が、歴史的につくられたものだ指摘する。1907年から1960年代までシカゴで活動した記者の回顧によると、記者はチームと一緒に旅をするだけでなく、球団持ちで選手と同じ部屋に泊まることもあり、記者と選手は球場を離れても付き合い、互いの秘密を守った。ベブ・ルースの女遊びやグローバー・クリーブランド・アレクサンダーの飲酒などは、無害でむしろ選手の魅力を引き出す事だと考えられたから報じられたのであり、本当に不都合なことは隠された。ほとんどの街では球団と地元紙の間に密な関係があり、運動面には新聞の他の面の倫理が通用しなかった。球団は取材を拒否することができたので、記者は自己保全のために自然と球団の意をくむようになった。また取材対象である選手のゴーストライターを務めることもあり、年俸交渉の時期に

記事によって選手を助けたり、逆に球団の手先となって動いたりすることもあった<sup>(61)</sup>。記者が選手のビジネスパートナーとなることは、大リーグ早期から見られ、クリスティ・ウォルシュは1921年にベーブ・ルースのゴーストライターとなり、最初の1年でルースの著作収入を500ドルから1万5千ドルに引き上げたという<sup>(62)</sup>。

## おわりに

悪いのは選手だけなのか。大リーグの薬物問題を考えるとき、多くの人の頭にはこの問いがあり、問いに対する答えが顕著に表れたのがボンズとクレメンスが多くの票を獲得した2017年の米国野球殿堂の投票結果だった。

ボンズ、クレメンスへの投票は、薬物使用の単なる許容ではない。支持への転換はステロイド時代の責任を2人の選手に負わせることへの疑問であり、その背景にあったのは、薬物蔓延に目をつぶったコミッショナーや薬物使用選手の力を借りて白星を重ねた監督、そして他の薬物使用選手や疑惑選手の殿堂入りであった。そこには投票者である野球記者が過去の報道を振り返り、殿堂投票での薬物疑惑選手の排除を偽善と感じたことも影響した。

ステロイド時代に大リーグに関わった人々が既に数多く殿堂入りしており、これからも候補となる。過去の殿堂入りを取り消せない以上、現在の候補に薬物疑惑があっても殿堂入りを認めて公平を期するというのは消極的な判断である。そこには選手の「品位」を問う投票規定の第5条へのこだわりはない。

殿堂の投票規定の候補者資格に関する条項で、年限などを除いた唯一の明確な条件は、大リーグ機構が定めた「失格選手でないこと」である。史上最多の4256安打を記録したピート・ローズはレッズ監督時代の野球賭博への関与で1989年に永久失格処分を受け<sup>(63)</sup>、殿堂入りしていない。一方で薬物使用者だけでなく品位が疑われる多くの選手が失格選手とならずに殿堂入りしているのも事実だ。

ジェイ・コークリーは人がスポーツに求める道徳的純正性は幻想だと論じた。スポーツ界は人種差別や男女差別、社会階級の低い人々の排除などを行ってきた<sup>(64)</sup>。野球もその例外ではない。チェーフエッツは、ギャングとの関係や殺人疑惑に至るまで殿堂選手が関わった不当な行いを指摘している。

例えば人種差別という観点で殿堂資格を見直すならば、大リーグの人種分離はキャップ・アンソンが1883年に黒人選手を含むチームとの対戦を拒否したことで始まったし、トリス・スピーカーとロジャース・ホーンズビーは白人優越主義の秘密結社クー・クラックス・クラン(KKK)のメンバーだったことが問題となるだろう<sup>(65)</sup>。これら3選手がプレーした時代は19世紀末、20世紀初頭、20世紀半ばまでとそれぞれ異なるが、その間人種差別は一貫して米国の社会問題であり、南部の多くの州では公共施設での人種分離は常識でもあった。教育や就職の機会など人種差別を禁じる公民権法が成立したのは1964年のことである。

大リーグも殿堂もこういった米国社会の一部であり、むしろ人種問題に関しては社会の動きに対して後れを取っていた。近代野球と言われる1900年以降大リーグが初めて黒人選手を受け入れたのは1947年のジャッキー・ロビンソンであり、人種分離の方針により大リーグ入りできなかった黒人選手たちは別に組織されたニグロリーグでプレーしていた。殿堂は「大リーグで10年以上プレー」という候補者の規定などを理由に1970年までニグロリーグ選手を受け入れなかった<sup>(66)</sup>。

しかし現在の殿堂には「誇りと情熱」と題した人種差別時代に関する展示がある。ニグロリーグの名選手を紹介するとともに、人種差別の歴史や黒人選手たちの苦難についても理解を促すコーナーが設けられているのである。大リーグが抱える負の歴史に目を向けるこうした姿勢は、殿堂がこれから薬物問題に対して示すべき対応の参考となるだろう。

殿堂投票者のマッカロンとスタークはボンズとクレメン스에投票した上で、ステロイド時代をテーマにした展示の開催を殿堂に求めている。殿堂を

歴史博物館とみなすなら、これは極めて妥当な要求といえる。薬物使用選手を責めてモラルの欠如を嘆くより、薬物使用を許容した球界幹部や報道陣を含めたステロイド時代を野球史の一部として殿堂が総括するべきである。ただそのためにはステロイド時代が過去のものとならなくてはならない。

大リーグの薬物検査導入から10年たった2013年、ヤンキースのアレックス・ロドリゲス、ブルワーズのライアン・ブラウンら14選手の禁止薬物使用が発覚し、ロドリゲスは2014年に1シーズンの出場停止処分を受けた<sup>(67)</sup>。スター選手の名が並んだ大リーグ史上屈指のスキャンダルは、ステロイド時代の終わりを象徴するニュースになるのか、それとも薬物を巡る終わりのないイタチごっこが今後も続くのか。以降、2017年まで目立った薬物使用の摘発はないが、楽観は禁物であろう。

1995年に野茂英雄がドジャース入りし、大リーグは日本でも大衆が観戦を楽しむ娯楽となった。ステロイド時代のただなかに取材を本格化させた日本の大リーグ報道は、米国の論調と無縁ではなかったはずだ。日本の大リーグ報道がたどった道と日本球界に与えた影響については、別の機会で検証することにした。

#### 謝辞

本稿のために意見を提供してくださった米国野球殿堂の投票者の皆さんに感謝の意を表します。一橋大学大学院社会学研究科教授の坂上康博先生には、論文の構成について貴重なご指導をいただきました。厚く御礼を申し上げます。また構想段階で有益なコメントをくださった一橋大学大学院社会学研究科の皆さんに感謝いたします。

#### 《注》

- (1) John Hoberman, "McGwire's Secret," *IRON GAME HISTORY* (Volume 5 Issue #3), Dec. 1998.
- (2) Shaun Assael and Peter Keating, "Who Knew?" *ESPN The Magazine*, 21 Nov. 2005: 69-84.
- (3) Jose Canseco, *JUICED* (itbooks, 2005): 75.
- (4) 全米野球記者協会公式サイト "Hall of Fame Election Requirements". <bbwaa.com/hof-elec-

req/> (2017年5月6日閲覧)

- 米国野球殿堂公式サイト "BBWAA Election Rules". <<http://baseballhall.org/hall-of-famers/bbwaa-rules-for-election>> (2017年5月6日閲覧)
- (5) アイヴァン・ウォディングトン, アンディ・スマイス (大平章, 麻生享志, 大木富訳) 『スポーツと薬物の社会学 現状とその歴史的背景』彩流社, 2009年, p. 257-258.
- (6) John Hoberman, *TESTSTERONE DREAMS - Rejuvenation, Aphrodisia, Doping* (University of California Press, 2005): 243.
- (7) "Event Timeline: Drug Policy coverage", *MLB.com*. (2017年5月6日閲覧) <[mlb.com/mlb/news/drug\\_policy.jsp?content=timeline](http://mlb.com/mlb/news/drug_policy.jsp?content=timeline)>
- (8) 同前
- (9) "A timeline of MLB's drug-testing rules," *Associated Press*, 28 Mar. 2014. <[usatoday.com/story/sports/mlb/2014/03/28/a-timeline-of-mlbs-drug-testing-rules/7024351/](http://usatoday.com/story/sports/mlb/2014/03/28/a-timeline-of-mlbs-drug-testing-rules/7024351/)>
- (10) Jim Bouton, *Ball Four: The Final Pitch* (Turner Publishing Company, 2014): 84, 151, 158, 172, 221. 1970年の著書にエピローグを加えた改訂版。
- (11) Canseco, 4.
- (12) Shaun Assael and Peter Keating, 73.
- (13) 以下、選手成績はすべて [baseball-reference.com](http://baseball-reference.com) による
- (14) "Barry Bonds Steroids Timeline," *espn.com*, 8 Dec. 2007. <[espn.com/mlb/news/story?id=3113127](http://espn.com/mlb/news/story?id=3113127)>
- (15) "Timeline: Roger Clemens," *Washington Post*, 12 Apr. 2012. <[washingtonpost.com/wp-srv/special/metro/roger-clemens-timeline/roger-clemens-timeline.2.html](http://washingtonpost.com/wp-srv/special/metro/roger-clemens-timeline/roger-clemens-timeline.2.html)>
- (16) Susan Slusser on Twitter, 5 Dec. 2016. <[twitter.com/susanslusser/status/805561184065703936](https://twitter.com/susanslusser/status/805561184065703936)> 以下、引用文の和訳は全て筆者。
- (17) Susan Slusser and Graham Womack, "Hall of Fame at peace with the Steroid Era," *Sporting News*, 27 Dec. 2016.
- (18) David Waldstein, "Hall of Fame Voters Soften Stance on Stars of Steroids Era," *New York Times*, 2 Jan. 2017.
- (19) 前掲米国野球殿堂公式サイト (2017年7月8日閲覧)
- (20) ストライキは1994年8月から95年4月までの232日間に及び、オーナー側は損失を約10億ドルと見積もった。Paul D. Staudohar, "The Baseball Strike of 1994-95," *Monthly Labor Review*, Mar. 1997: 26.
- (21) Canseco, 133.
- (22) Jake Kaplan, "Astros legend Jeff Bagwell elected to Hall of Fame," *Houston Chronicle*, 18

- Jan. 2017. <[chron.com/sports/astros/article/Astros-Jeff-Bagwell-voted-Baseball-Hall-of-Fame-10866925.php](http://chron.com/sports/astros/article/Astros-Jeff-Bagwell-voted-Baseball-Hall-of-Fame-10866925.php)>
- (23) Steve Wilstein, "Drug OK in Baseball, Not Olympics," *Associated Press*, 21 Aug. 1998.
- (24) Tim Harris, *SPORT - Almost Everything You Ever Wanted to Know* (Yellow Jersey Press, 2007) 472-473.
- (25) Cliff Corcoran, "Fifteen years ago today, Steve Wilstein first shed light on the Steroid Era," *SI.com*, 22 Aug. 2013.
- (26) Murray Chass, "Baseball Tries to Calm Down a Debate on Pills," *New York Times*, 27 Aug. 1998.
- (27) Assael and Keating, 78.
- (28) Willam C. Rhoden, "Baseball's Pandora's Box Cracks Open," *New York Times*, 25 Aug. 1998.
- (29) Buster Olney, "Opponents Don't Fault McGwire for Pills," *New York Times*, 25 Aug. 1998.
- (30) Bryan Curtis, "The Steroid Hunt: We know what MLB players we doing during the steroid era. Here's what baseball writers did", *GRANTLAND*, 8 Jan. 2014. <[grantland.com/features/mlb-hall-fame-voting-steroid-era/](http://grantland.com/features/mlb-hall-fame-voting-steroid-era/)>
- (31) Mike Shannon, "Was 1998 baseball's greatest season?" *Cincinnati Enquirer*, 27 Apr. 1999. <[enquirer.com/editions/1999/04/27/loc\\_was\\_1998\\_baseballs.html](http://enquirer.com/editions/1999/04/27/loc_was_1998_baseballs.html)>
- (32) Tim McCarver and Danny Peary, *The Perfect Season: Why 1998 Was Baseball's Greatest Year* (Villard, 1999)
- (33) Mike Lupica, *Summer of '98: When Homers Flew, Records Fell, and Baseball Reclaimed America* (Putnam Adult, 1999)
- (34) Corcoran
- (35) Dan Shaughnessy, "This persecution of McGwire a crime," *Boston Globe*, 26 Aug. 1998.
- (36) Bernie Miklasz, "Everyone Seems Pumped Up about McGwire and Andro," *St. Louis Post-Dispatch*, 29 Aug. 1998.
- (37) Keith Olbermann, "Nobody Elected to HOF: We Deserve It," *MLB.com*, 8 June 2013. <[espn.com/mlb/story/\\_/id/8769398/a-writer-gives-hall-fame-vote](http://espn.com/mlb/story/_/id/8769398/a-writer-gives-hall-fame-vote)>
- (38) カールハイブリッヒ・ベッテ, ウヴェ・シマンク (木村真知子訳)『ドーピングの社会学 近代競技スポーツの臨界点』不昧堂, 2001年, p.13。
- (39) Jack McCallum, "SWALLOW THIS PILL - Big Mac's super-sizing supplements shouldn't taint his super season," *Sports Illustrated*, 31 Aug. 1998.
- (40) Miklasz.
- (41) ベッテ, シマンク, 前掲書 p.125。
- (42) Assael and Keating, 74, 79.
- (43) Harris, 472-473.
- (44) Eメールによる取材 (2017年6月1日)。
- (45) Canseco, 203-204.
- (46) "Text of Mark McGwire's statement on steroids," *USA Today*, 11 Jan. 2010. <[usatoday.com/sports/baseball/2010-01-11-mcgwire-statement\\_N.htm](http://usatoday.com/sports/baseball/2010-01-11-mcgwire-statement_N.htm)>
- (47) Shaughnessy.
- (48) Assael and Keating, 79.
- (49) Bryan Curtis, "The Steroid Hunt: We know what MLB players were doing during the steroid era. Here's what baseball writers did," *GRANTLAND*, 8 Jan. 2014. <[grantland.com/features/mlb-hall-fame-voting-steroid-era/](http://grantland.com/features/mlb-hall-fame-voting-steroid-era/)>
- (50) Eメールによる取材 (2017年6月1日)。
- (51) Hoberman (1998).
- (52) 本稿2章②の1。
- (53) ベンジャミン・G・レイダー (川口智久, 平井肇訳)『スペクテイタースポーツ 20世紀アメリカスポーツの軌跡』大修館書店, 1987年, p.148-152。
- (54) "Peter Ueberroth, A Definitive Record," *baseball-almanac.com* (2017年6月24日閲覧) <[baseball-almanac.com/articles/peter\\_ueberroth\\_biography.shtml](http://baseball-almanac.com/articles/peter_ueberroth_biography.shtml)>
- (55) "1994 Strike was a Low Point for Baseball," *Associated Press*, 10 Aug. 2004.
- (56) Assael and Keating, 74.
- (57) "Commissioner Bud Selig Biography," *baseball-almanac.com* (2017年7月9日閲覧) <[baseball-almanac.com/articles/bud\\_selig\\_biography.shtml](http://baseball-almanac.com/articles/bud_selig_biography.shtml)>
- (58) Assael and Keating, 74.
- (59) ベッテ, シマンク, 前掲書 p.210
- (60) Hoberman (1998).
- (61) Zev Chafets, *COOPERSTOWN CONFIDENTIAL: Heroes, Rogues, and the Inside Story of the Baseball Hall of Fame*, (Bloomsbury, 2009): 58-59
- (62) レイダー, 前掲書, p.7-8。
- (63) "Pete Rose / A. Bartlett Giamatti Agreement," *Baseball Almanac.com*, 24 Aug. 1989. <[baseball-almanac.com/players/p\\_rose.shtml](http://baseball-almanac.com/players/p_rose.shtml)>
- (64) ウォディングトン, スミス, 前掲書 p.27。
- (65) Chafets, 52, 56-57.
- (66) Chafets, 128-136.
- (67) Paul Hagen, "Arbitrator: A-Rod suspended for 2014 season," *mlb.com*, 11 Jan. 2014. <[mlb.com/news/article/66433260/arbitrator-rules-alex-rodriguez-to-be-suspended-for-2014-season/#](http://mlb.com/news/article/66433260/arbitrator-rules-alex-rodriguez-to-be-suspended-for-2014-season/#)>